

国際競争力とは何か

ー ジャカルタで考えるー

開倫塾

塾長 林明夫

Q：ジャカルタへは何をするために行ったのですか。

A：(林明夫：以下省略)ダボス会議の主催団体であるワールド・エコノミック・フォーラム(World Economic Forum)が毎年東アジア各国で開催している東アジア経済会議が、2011年は6月11日から13日までインドネシアのジャカルタで開かれましたので、それに参加するためです。合計600名の参加者のうち、日本からの参加は約30名でした。会議の共通言語は英語。多くのセッションで、日本語と中国語、インドネシア語の同時通訳ができました。

東アジア経済会議は今回で20回目。インドネシアでは初めてでしたので、外国投資の促進を願うユドヨノ大統領はじめインドネシア政府を挙げての開催でした。私は、2001年以来毎年参加し、今回は11回目でした。

Q：日本の東日本大震災についての議論はありましたか。

A：ユドヨノ・インドネシア大統領や次回開催地であるタイのアピシット首相、リー・シンガポール首相はもとより、全参加者から温かいお見舞いの言葉を頂き、感激をしました。私は、タイのアピシット首相から握手を求められ、お見舞いの言葉を頂きました。

お見舞いは有り難かったのですが、ただ、会場の至るところで議論されていたのは、日本が今まで担っていた製造拠点としての役割を今後はインドネシアはじめ新興諸国でどのように肩代わりすることができるかという話でした。特に、中国、インド、ベトナム、タイなど勢いがある国々の代表には、今こそ自分たちの果たす役割は大きいとの自負がみなぎっていました。

Q：新興諸国に国家や経済を牽引する人材はいるのですか。

A：いるどころではありません。どこからこんなにたくさん来たのかと驚くほど、大量に存在します。欧米の大学や大学院に留学して優秀な成績で卒業し、欧米の大企業で大活躍している30～50歳位のバリバリのビジネス人材が、景気回復が遅れている欧米に見切りをつけて、母国や振興諸国に大量に戻ってきているからです。

私は、1990年代後半に「エコノミスト」というイギリスの経済週刊誌主催の各国政府との円卓会議に年5～6回参加し、2001年よりこの東アジア経済会議と、日本アセアン経営者会議という会議に毎年参加し続けていますが、今回ほど新興諸国の各国にバランスよく優秀な人材がそろった会議を見たことがありません。

自国の利益(国益)を代表して各国代表と英語のみで堂々と議論し合う30～50歳代の政府関係者

とビジネス人材を目の前に見て、これは大変なことになってきたと密かに思いました。

その中でも著しい活躍を見せたのが、各国の女性の代表です。頭脳明晰で課題の設定や具体的な解決策の提示など舌を巻く方が数多く見られました。

Q：大変なことになってきましたね。

A：はい。引きこもりがちであったところに東日本大震災で意気消沈し、このような大事な国際会議に 30 名という少人数の代表しか送り込めない日本は、アジアの新興諸国からの経済面での大津波に襲われる直前のような気持ちに私はなりました。

Q：林さんはどうしたらよいと考えますか。

A：今は、明治維新、第二次世界大戦終戦直後と同じだと考えたほうがよいと私も思います。

今までの成功体験や贅沢な身の程知らずの生活をすべて捨て去り、国や地方はもちろん学校や企業に至るまですべての「しくみ」をゼロから見直し、身の丈(たけ)にあったものを再構築すべきです。

小選挙区制で常に政治が混乱し続けるのであれば、憲法を改正し、一院制にするか、もとの中選挙区制に戻す。一票の価値の平等は、一日も早く実現する。外国人留学生を一人でも多く日本に就職させる。夫婦別姓を導入する。介護施設は、坪当たりの建築費用を 100 万円近くかけなくても、簡易な建物も認める。小学校から大学まで、学校の英語の授業はすべて英語で行う。他にも、お金をかけずに、人口を増やして国際競争力を強化する方法は山ほどあるのです。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営者や経営幹部の皆様にお伝えしたいことはありますか。

A：皆様の教え子である児童・生徒は、人口が増え続け、経済状況が好転している新興諸国の極めて勉強熱心な同世代の人々と死ぬまで競争する運命にあります。私もうがなばりますので、どうか皆様もしっかりとした教育をして頂きたく存じます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：最近読んで有益だったのは、ゴールドラット著「ザ・ゴール」ダイヤモンド社 2001 年 5 月 17 日刊、エイミー・チュア著「最強国の条件」講談社 2011 年 5 月 10 日刊、波頭亮・富山和彦著「プロフェッショナル・コンサルティング」2011 年 6 月 9 日刊、「マイケル・E・ポーター、戦略と競争優位」ハーバード・ビジネス・レビュー 2011 年 6 月号ダイヤモンド社刊の 4 冊です。経営者としての勉強のために、是非、ご熟読を。

お詫び

2011 年 6 月号で予告したパリでの「OECD フォーラム 2011」には、OECD 本部から正式な招待を受けたのですが、日程の調整がどうしてもつかず、参加ができませんでした。そのため、御報告ができないことをお詫び申し上げます。

— 2011 年 6 月 24 日記す —